VTuber卒業、中の人の感傷

葉桜照月

「篠沢伊織、っと……署名はこれで大丈夫ですかね」
「……ええと、はい。じゃあ最後にここにハンコを」
言われた通りに判を押して、誓約書が完成する。業務上知ったことを公開しないだとか、そういういたって普通の誓約書だ。ただ、通過儀礼でもある。私が篠沢伊織であるための、禊。
「じゃあ、これで終わりです。……ありがとうございました」
「いえ、こちらのセリフです。スタッフさん、いままで本当にありがとうございました」
「仕事ですから。これでもう、あなたを牛充紅葉と呼ぶ訳にはいきませんね」
「あはは。でも、牛充紅葉のことは忘れません」
「私もです。……ではさようなら、篠沢さん」
「……さようなら。また、どこかで」

都内某所の事務所を出ると、三月には到底ふさわしくない寒空が私を包んだ。
この二年間何度も訪れたのに、ひょっとしたらもう二度と中を見ることはないかもしれないこの事務所は、株式会社フロムワン。VTuber集団「四次ライブ」の運営会社だ。
四次ライブと言えば、バーチャルユアチューバー、所謂VTuberについて少しでも知っているなら知らぬはずもない超有名集団だ。VTuber流行初期に生徒会長系VTuberで圧倒的な人気を獲得したことで一気に有名VTuber集団の仲間入りをし、その後も圧倒的な数の所属者を送り出し続ける、界隈随一の大規模箱。そして私は、そこに所属する一人のVTuberの中の人――だった。

牛充紅葉（うしみつもみじ）。四次ライブに所属するVTuberだ。読書が好きで夜更かししがちな高校三年生の女の子。登録者数は八万八千人。
本の虫という設定に違わぬ幅広く豊富な読書トークや、「母親に寝かしつけられている錯覚に陥る」とも言われる童話朗読配信などで人気を集める一方、昔話朗読寝かしつけ配信で自分が寝落ちる、童話朗読配信と偽って『チャタレイ夫人の恋人』を読もうとする、パソコンゲーム・『メインクラフト』で本棚ブロック千個揃えるまで終わらない配信をする、本棚ブロックがないという理由だけで他の四次ライブ所属VTuberの作った家を酷評した挙句勝手に改装するなど、変人揃いの四次ライブに相応しい癖の強さでも知られる。

四次ライブの中ではチャンネル登録者数で言えば真ん中より下くらいだったが、昨日、三月十五日を以って、四次ライブを卒業……つまり、活動を停止することになったのだ。そしてさっき、正式に会社との雇用契約を解消し、私、篠沢伊織は、牛充紅葉ではなくなった。

卒業の理由は単純だ。中の人……つまり私が、リアルでは大学四年生で、配信生活の傍らずっとやっていた就活が実を結んだ、けれど入りたい会社が副業禁止だった――それだけの話だ。珍しくもなんともない、あまりにありふれた理由。VTuberの仕事は永遠にはやっていられないだろうから、会社の方が将来的には収入面で安定するだろうという判断で、名残惜しさはあるが、心残りはない。正しい判断だと思っている。

事務所の入り口は大きな通りから一本入った所にあって、目抜き通りまで出ると、一気に視界が広がり、排気ガスが鼻を突き、高収入アルバイトの宣伝カーの騒音が耳を裂く。

新鮮だ。

勿論、今日事務所に行く時にも通ったはずの道だ。なのに、全てが新しく感じる。初めて訪れた国の空気でも吸っているような感覚。VTuber としての枷が外れ、就活も実り、そういう意味では確かに生まれ変わったとすら言ってもいいだろう。重圧が五感を抑圧していたらしく、本当にここが二年もの間歩いたその道なのだろうか、と思う。こんなところにこんな店がある。こんな看板立ってたっけ。こんなに人多かったのか。そんな発見ばかりだった。

道を間違えているんじゃなかろうか。見知らぬ景色故だけではない、行きの時よりも駅までがずっと長く感じたのだ。感覚が鋭敏になり、飛び飛びの記憶が鮮明になる。どうやら、牛充紅葉を被っていた私は、何も考えず、何も感じずにこの道を歩いていたらしかった。

駅は高架で、車窓からは林立するビルと密集する低層住宅がよく見えた。澄んだ空と高い太陽に、今日これからの予定を思い出す。どこかで降りて時間を潰し、夕方には料亭で同僚――いや、『元』同僚二人と落ち合う。たしかそんな予定だったはずだ。

それにしても晴れている。天高く馬肥ゆるのは本当は秋なのだが、春先である今にも適用できるかもしれない。

車窓からでは高く、青く、透き通った空の頂までを見ることはできない。眼の前に張られた硝子が歯がゆくて、思わず知らない駅――何度も通っていたはずの――で降りる。ホームと直角になって線路の下を貫く目抜き通りには、近くに高校でもあるのか制服の学生が彷徨っている。おおかた昼飯をどこで済ますか迷ってでもいるのだろう。彼らから道路を挟んで対岸には巨大な電気屋が聳え、ホームで電車を待つ人々向けに高さと角度を調節された超巨大テレビが最新の空気清浄機についてどうのこうのと言っている。しばらく見ていると入会金無料のポイントカードの宣伝を挟んでまた同じ言葉を発し始めた。

ホームは島式で、駅を挟んだ反対側を見るのも容易い。こちらは通りの両岸に雑居ビルが並んでいる。駅に最も近いビルには、やはりホームの電車待ちを狙って設置された電光掲示板が文字を流している。韓国料理、整体、雀荘、法律事務所。どうせこんな都会の駅、待ち時間など三分もあれば長い方だというのに、いつになったら一周するのか分からないヘタクソな電光掲示板ばかりだった。そういうのに限ってしょっちゅうピカピカと点滅を始めるのが眼に毒で腹立たしい。

こんなに物事を観察するのも久しぶりで、まるで失っていたものを取り戻すような感覚だった。それでも、それを新鮮と呼ぶのであれば、これらはあまりに新鮮すぎる、と少し思う。せわしない人の流れ、頭を掻き回す環境の音。極彩色で色付けのなされた目眩めく世間。気の狂うような情報過多の新世界に圧倒される。VTuber を始める前はこんなものと相対していたのか、と思う。そうしてはじめて、VTuber がそんな時代の津波を忘れさせていたのだという実感が湧き出る。

そうか、それが、没入か。没頭と言うのは、昨日までのあの日々の事だったのか。

私は、何かに夢中でいられたのか。

それに気付いて、少しの寂しさが心に残った。

夕方。料亭は厳かな雰囲気を出していた。このどっしりとした佇まいからするに、高級料亭と言うべきなのだろう。舌の肥えていない身としてはスーパーの冷凍食品――新生活応援フェアで最近安い――と味の違いが分からなかったらどうしよう、と思った。

今日何故集まったかは分かりきっている。私の慰労と壮行だ。私の引退が決まってすぐ、二人とも時間を空けてくれた。彼女らのスケジュールや人気を考えれば、最早 VTuber ではなくいち一般人になった私なんかの為に時間を開けることなど本来ありえないのだが、どうしても、と言われて開催されることになった。新たな門出を祝われることは本来はありがたいはずなのだが、何故か恐れ多さが勝ってしまう。

それだけではなく、何か申し訳なさのようなものも感じていた。私の就職先は VTuber になんの関わりもない。やはり今になっても、引退するという判断が間違っていたとは思っていないが、いざ VTuber を続けている人間に VTuber 引退を祝われるのは、砂をかけて出ていった感覚と言うか、ばつの悪さがある。

「なら、フロムワン社に就職すればよかったのに」

悩みを打ち明けると、テーブルをはさんで真正面の彼女はきょとんとして言う。

沼田真純。中世的な異世界から旅行してきた女騎士という設定の四次ライブの VTuber、サーシャ・グレイトフルの中の人だ。牛充紅葉とはデビュー時期的に同期の間柄で、何度もコラボを開いた、相方に近い VTuber だ。オ

フで会った回数も数回どころではない。羨ましいことに牛充紅葉よりも実力と人気があり、この前登録者数十五万人記念配信をしていた。この人は一つ年上の大卒で、どこか会社に務めはせず、VTuber としての収入と日々のアルバイトで生活をしている。

そんな彼女は、VTuber 業界を出ていくのが辛いなら、VTuber 業界にいればよいのだと言ったのだ。

「え、それって要するに裏方ってこと？」

「そう。だってスタッフさんも楽しそうだし。ライバーのマネージャーとかどうよ」

「でも厳しいんじゃない？　VTuber に携わりたいなんて人沢山いるだろうし倍率が……」

「心配いらないじゃない。コネ入社よ、コネ入社」

「そんなの、他の人に申し訳ないじゃん」

「これだから伊織ちゃんは。裏方の仕事はずっと見てきたわけだし、何をサポートされたいか分かるだろうし。コネ入社とかじゃなくて即戦力なのよ、単純に。……ねぇ？　和花も何か言ってやってよ」

そうやって言うと、真純は彼女の隣、つまり私から見れば斜め前の方を向き、そこに座ってお品書きを黙読していた人物に意見を求めた。

藤川和花。リケジョ系研究者VTuber、天道測理（てんどうはかり）の中の人。この人は四次ライブではない別の企業勢で、その箱の中の実質的なリーダーである。登録者数は全VTuber 中トップテンに入る六十万人弱を誇り、約一万を数える全VTuber のなかでも頂点にいると言って差し支えない。もろもろを足し合わせれば年収は二千万とも二千五百万とも囁かれるが、怖いので私は聞いていない。サーシャですら私にとってはずっと上の存在なのに、この人は雲は雲でもオールトの雲の上の存在だ。

私と真純と和花の三人はお互いに VTuber としての仕事の過程で知り合って意気投合したのをきっかけに、それ以降時々オフで会って飲んだり遊んだりする。今回もその一環だが、もうすでに同業者仲間という最初のきっかけは私によって崩されているから、私は今日をもってこの二人とも疎遠になろうかと考えている。

和花は、どうやら話を半分くらいしか聞いていなかったようで、「和花もそう思うでしょ」と聞かれると、「いや実は私もそう思ってたところなんだ、間違いない、確実にそう、いつものことながら真純は良いことを言うなあ」といったように、お得意のとりあえず全肯定デッキを繰り出した。和花は同意をもとめられた時だいたいこのデッキを使うが、「お昼どこがいい？」みたいな意見を求められた時も全く同じように言うから、ロクに話を聞いていなかったことは容易に察することが出来る。それは真純もわかっているから、改めて説明する。

「伊織が今更になって、VTuber に未練があるらしいよ」

「ほう成程」

「そんなこと言ってない！　悪意ある切り取り！」

「実際そうじゃない。VTuber 辞めたその日にこんなおセンチさんになってるんだから」

「ああ、そういうね。つまり、VTuber を辞めたことが正しいか正しくないか悩んでいる、と？」

それは違う。正しかったとは思っているし、その根拠もある。だから、そこで悩んでいるわけではない。そう伝えると、和花はそう言うのは分かっていたとでもいう風に、すぐに返す。

「ふむ。その根拠と言うか、何か自分の中で正しかったと納得できる理由はなにかな」

「稼ぎの問題。私は十万人行ってなくて、今もアルバイトと仕送りがないとなかなか余裕がないから普通に就職した方が、将来は安定するでしょうって思って。和花も真純も、こういう悩み方はしないでしょ」

「まあ私は VTuber でもう一生分稼いでるからね」

と言う和花は得意気だ。それを聞いて、届いた鍋の火の管理をしていた真純が呆れたように言う。

「もっと謙遜しなさいな」

「事実さ」

だが彼女はそれに対して悪びれもせずからからと笑っているだけだった。だが、すぐに私の方を向いて、

「成程。納得はしているはずだ、と。なのに？」

「……」

……そう。何故だか分からないけれど後ろ髪をひかれるのだ。

「それを真純は未練と言った、そうでしょ？」

「だって未練以外の何物でもないじゃん！」

「まあまあ。確かに未練かもしれないけど。でも、未練ですって言い切るだけじゃ解決しない。その感情が何に由来するものなのかはっきりさせなきゃね。心当たりは？」

心当たりと言われて思いつくのは、複雑なものではなく単にこれから訪れる新天地が不安で仕方ないとかだろうか。考えていると和花は全部当ててくる。

「新しい環境が怖いから、って顔だね。確かにそれは間違いなくあると思う――でもね、」

そこまで言うと和花は鍋のチクワをつまんで、湯を切ってからその穴を通してこちらを見る。
「でも、もしそれだけなら、君はふた月もすればそのモヤモヤを完全に消してしまえるはず。でもそうはならないんじゃないかな？」
そう言われてはじめて、このモヤモヤはすぐ収まる類のものではないような気がした。だが、そこまで行ったところで、鍋がいよいよ出来上がり、食べるのに集中することになった。「伊織の門出に乾杯」という祝いの声が、嫌に耳に残った。

宴もたけなわといった頃になって、今までの振り返りの内容もいよいよ少なくなってくると、どうしても話はさっき流れてしまったものに戻ってきてしまう。和花はこういった。
「もう一回 VTuber をやりなおすのはどうかな。個人勢に転生したり、事情があったとはいえ引退を半年で撤回して復帰したり。別企業の VTuber としてしれっと再デビューした例すらある。どれも君たちの箱の話」
それを聞いて真純が隣で苦い顔をする。今出た話題、特に別企業への引き抜かれは会社の失態そのもので、誰もが触れたがらない黒歴史だ。私はもう外部だからどうでもいいが、現役の真純にすれはカサブタをいきなり捲られたようなものだろう。だがそんなことを気にも留めない和花は、あるいは、と一言おいてさらに続ける。
「たしか真純は、VTuber としての経験を生かして裏方として就職すればよかったのに、って言ってたんだっけ。これもアリ。君の古巣フロムワン社に限らず、実はもともと牛充紅葉でしたなんて言ったらこの業界なら引く手数多でしょうね。うちの会社だってマネージャー探しには苦心してるみたいだから」

帰り支度をしていると、真純が一人会計に向かう。奢ってくれるそうだ(和花は私にも奢ってよとねだったがすげなく断られた)。申し訳ない。
帰り道になると真純だけが違う駅の方で和花と私は駅までは同じだ。雰囲気はやや重く無言の空間が広がっていたが、駅が近づくと和花は突然にこう切り出した。
「でも伊織、もし君が未練を持っているとして、じゃあ何に未練を抱いているんだろう。もしそれが配信することなら、マネージャーになっても意味がない。たくさんの視聴者と交流することなら、個人勢になっても満たされることはない。ちゃんと見極めないと、何を失敗したか把握することすら失敗する。VTuber をやめた今だから、VTuber の中の人としての篠沢伊織を見つめなおさなきゃいけないんだ。……もっと分かりやすく言おうか」
そこまで言うと和花はおもむろに立ち止まる。そして私の方をまっすぐに見つめて、
「VTuber をやってて、何が楽しかった？」
と、確かにそう言ったのだった。

家に帰ると暗い。久々に篠沢伊織が帰ってきたぞと心の中でただいまを言う。リビングの一角には配信で使ってたスペースがあるが、嫌にスカスカで不自然さが湧いた。
配信機材はフロムワン社に置いてきた。マイクとかはそもそも借り物だったし、いくつか持ってた自前の機材もフロムワン社がいいお値段で買い取ってくれたからだ。だからもう、ゲーミングPC、ゲーミングチェア、ごついマウスだけがそこに残っている状態だった。
それでも、それらはおよそこれから就職する一人暮らし女子大生の持つ物ではない。そう考えると、この椅子もPCも、紛れもなく牛充紅葉のものだったのだと感じる。ここにいて、マイクに向かっていたのは、篠沢伊織ではなかった。そういう意味では、牛充紅葉という仮想は、ここに確かに存在していたのかもしれない。
ゲーミングチェアに座ると、配信を始める準備をしたくなる。この二年間ですっかり染み着いてしまった。水筒を用意していないのを無性に不安に感じ、もう無いマイクの位置を調節し、もう消した配信用アプリのあった場所をクリックする。廃人か狂人のようだ。
自分でも何をしているんだろうと思いつつ、過ぎた思い出の余韻に浸り続ける。マイクのあった場所に、咳払いをして声の調子を整えた後、

「あ、あ、あ。聞こえてるかな？
おはうし～。うしみつもみじですっ。音大丈夫ですかね。……あ、BGMちょっと大きい？　ちょっと待って……
……これでどう？」

と、呟く。自然と口を突いて出る、配信最初の挨拶。もう何十回何百回とこなした、慣れた口の動き。
パソコンの画面の縁には、付箋が四枚貼ってある。
『くしゃみの時はミュート』
『今度からはアクビもミュート！』
『ちゃんと配信切ったか確認』
『スパチャには即反応！明るくハッキリ感謝を述べろ』

はがしてもいい付箋だったが、ふと思いとどまる。そうして、自分が思っていた以上に牛充紅葉に未練があるのだと思い知る。そうだ。PCもチェアも、牛充紅葉のものならば会社に寄付してくれればよかったのに。どうせ牛充紅葉の稼いだ金で買ったものなのだから、篠沢伊織という現実世界の人間とは、全く何のかかわりもなかったはずだ。

配信のたびに必ず無言で3000円のスパチャを送ってくる人が居たっけ。前に一回だけゲリラ配信をやったら流石に現れなくて、後でユアチューブのアカウント名でツィッター検索にかけてみたら、それはもう悔しがってた。その人は単なる一視聴者だからその人の都合に合わせるのはよくないと思いつつも、もうゲリラ配信はしないと心に決めた。

スパチャは必ず無言で、コメントもあまり多くはせず、牛充紅葉のツィッターアカウントへのリプライはほとんどない。でも「ログボ兄貴」とか呼ばれてる程度にはほかの視聴者さんの間でも名物扱いで、スパチャがあると「ログボニキがいる!」「定期」「これがないと始まらない」とかいくつかコメントがつくのがお約束だった。

最後の配信にも来てくれてた。いつもなら配信始まってすぐに3000円のスパチャが飛んでくるのに、その時はこなかった。おや、と思ったが、口に出すわけにもいかず、コメント欄で何人かが「ログボ兄貴おらんやん!」ってコメントしてるのを見て、いやほんまそれな??って思った。

最後の最後になって、私が半泣きになりながら話してた時に、

――餞別　なかないで

とだけ書かれた一万円の真っ赤なスパチャが飛んできた。

もう最後だというのに、その一万円は配信環境を良くしないのに、こんなにも思い切って、送り出してくれた。牛充紅葉という虚構の向こうにいる現実の人間を、その時確かに意識されていた。明日からの現実に希望を持てるように。昨日までの虚構に決別をつけられるように。

篠沢伊織に贈られた、牛充紅葉の六文銭だった。

明るくハッキリ感謝を述べられなかった、それが、私の最後の後悔。

四次ライブのVTuberたちは、キャラクターに与えられた設定から少し外れた中の人トークを出すことも多くなかった。高校生なのに「学生時代の思い出」を語りだしたり、ロリのはずなのに三十年前のアニメ文化にやたらに詳しかったり。我々は声優ではないし、そのギャップも含めて楽しむコンテンツでもあるのだから、これ自体に私は反対ではなかったが、それでも私はあまり中の人は出さなかった。

視聴者が見ている牛充紅葉を壊したくなかった、あのときはそう言い聞かせていたが、今、牛充紅葉を失った今となっては、それが嘘で本当は単に、篠沢伊織を出すのが怖かっただけなのだと確信を持って言える。特定が怖い、というのとはまた別で、視聴者はこんな就活大学生を見たいわけではないのだと。いつも図書室にいるような大人しい本好き、だけど時々壊れる不思議な同級生気質のキャラクターを見ているのだと。

あるいは、私に自信がなかったのかもしれない。私は中の人を出しても大丈夫なほど牛充紅葉を確立できていない、そう言ったら御大層に聞こえるが、要するに私は牛充紅葉を上手く運用できていない、そう思っていた。

だが私は、引退という最悪の形で、篠沢伊織を出してしまった。高校三年生だからこの三月で卒業するんだよ、だなんて建前、あまりにも見え透いている。引退とはどこまで行っても中の人の事情、私はそれを甘く見すぎていた。

けれど、視聴者のみんなは、私をちゃんと見ていた。篠沢伊織もまた、牛充紅葉を構成する要素の一つとして、認めてくれていたのだ。それを引退のその日その配信で知ってしまったのは悲しいが、引退することで初めて知ったというのは皮肉でならない。

未練？

自分には未練があったのだろうか？

何故。何に。

そんなことを考えるには、今日という夜は遅すぎる。

気付くと朝だった。確認するまでもなく、目は赤く腫れ、ベッドのシーツやおろしたての枕には小さいシミが出来ている。

テレビをつけるとなんでもないニュースが流れ、カーテンを開けると暖かな朝の光が舞い込む。

スマホを見ると、真純と和花からそれぞれラインが来ていた。真純からは単純な励ましと、そして、また会おうねという六文字が、五分強の間を置いて送られていた

和花からは、ただ一文。「もう一度聞く。Tuberをやってて、何が楽しかった？」

――VTuber をやってて、何が楽しかった？

分からない。

VTuber なんて、電波に乗せられるような顔してないから絵を被って萌え声で童貞釣ってる下卑た奴らだとアンチに言われてきた。それをわかってオーディションを受け、あの世界に飛び込んだ。ツイートをすればキモいおじさん構文のリプライが何通も来るし、凌辱されてる絵も嫌と言うほど描かれる。ちょっとでも失言をすれば対立煽りと杞憂民とガチ恋勢が地獄のような争いを繰り広げる。名前も顔も声も性別も知らない九万人の誰かさんの為に、膨大なはずの自分の時間を切り売りして、それでもそれだけで暮らしていけるほどは稼げない。

それを、二年もやっていた。

どうしてだろう。何がそこまで私を突き動かしたのだろう。

二人のラインはブロックするつもりだった。けれど長い長い思考の末に、ミュートにするにとどめた。

結局、答えは出ていない。しばらくは出ないだろう。

それでも。

この現実も、あの仮想も。私の一部なのだと。

今はそう思って。

現実を、生きていく。

あとがき

問題です。もし牛充紅葉ちゃんが本当にいたとして、チャンネル登録者数八万八千人の彼女は、一万人以上いる VTuber 全体の中で、何番目くらいでしょう。

正解は、およそ２１０位。

実は彼女も、上位２％の優等生なのです。

VTuber の９割は、登録者数が五千人に満たない。

一円でも収入があり、仕事である時点で、彼女の悩みはとてつもなく贅沢です。

でも私は別に、最下層に是非目を向けてほしいとか言うつもりはありません。この事実はむしろ私自身に突き付けています。私はずっと VTuber になりたかった。けれど、それは期待しているほど楽しいものではない。どんな VTuber になり、どんな企画をするか。それを考えている今が一番楽しい。そう自分自身に言い聞かせるために、このあとがき、ひいては作品自体を書いています。

なお、VTuber とか知らんしこの作品も分からん単語が多すぎたという方は私が三文文士会ＨＰブログに掲載しているだろう単語解説が参考になるかもしれません。

最後に謝辞を。読者の皆様、数字の参考とした集計サイト様、執筆ストレスから罵声を浴びせてしまったのに怒らないでくれた親友Ａ、そして休業から戻ってきてくれた最推し・矢車りねに心から感謝申し上げます。

葉桜照月